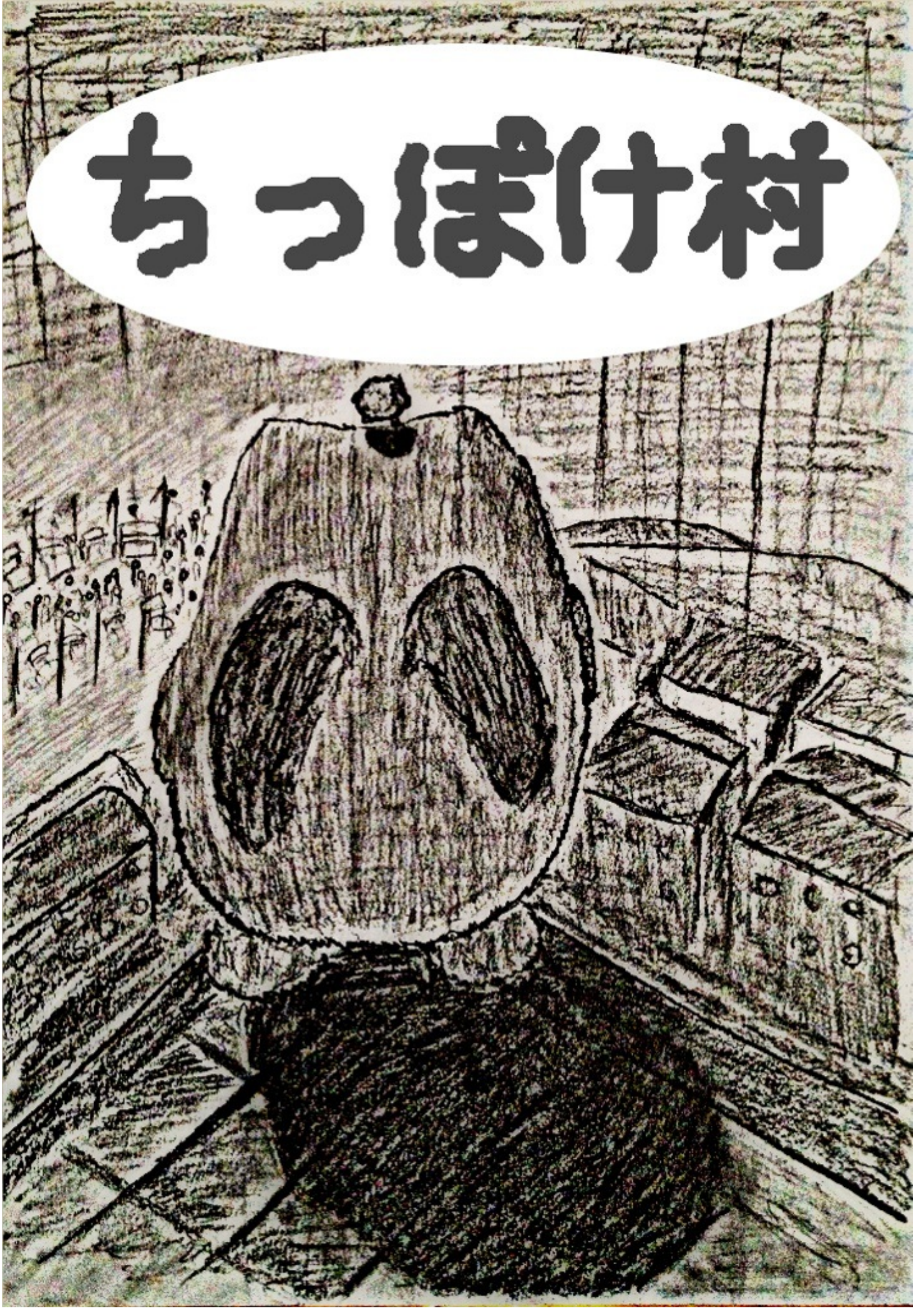
ちっぽけ村

「出せ。出すんだ」
　何度蹴っても、石は動かない。
「ちくしょう」
　アリの巣である。地下、およそ一メートルのところに、村長はいた。
　地下に村を展開するのも、悪くない。そう思って、アリの巣を見に来たのだった。視察である。
　アリは、クロオオアリという種だった。サムライアリは、強そうなのでやめた。
　歩き回る働きアリを押しのけ、村長は巣穴へと入っていった。だが、しばらく歩きまわったところでつまみ出されたのだった。
　怒った村長は、石を転がしてきた。村長いわく、巨岩である。
　米粒大の石っころを、穴めがけて、転がした。そして、目を覚ますと、このざまだった。石と一緒に転がってしまったのだ。石は、狭まったところに引っ掛かり、穴をふさぐ格好になっている。
　働きアリたちは、懸命に石をどかそうとするが、村長が邪魔で、そうはいかない。
「だから、村長に任せておけばいいんだ。全く」
　仕方なく、別の道を通り、アリたちは地上に出ていくことにした。
「やっと静かになったな。これで集中して、この巨岩と向き合えるというものだ。早く、助けに来てくれ。モンササよ」
　もう、村長は疲れてしまっていた。腹も減っている。
　出ていったアリたちが、戻ってきた。
「お前、うまそうなものを持っているな。村長にも、くれよ。くれよ」
　パンのかけらである。すばやく、奪い取る。
　ほおばりながら、村長はうろつき始めた。ますます、地中深くへ、潜っていく。

　地上。モンササは、細長い棒をアリの巣へ突っ込んでいた。出したり、入れたりしている。なかなか、村長は釣れない。
　少し前までは、声も聞こえていたのだが、今は、とても静かだ。
　奥の方まで、棒を入れてみた。何かに、ぶつかったような気がした。棒を抜いてみる。特に、変わりはない。

「これ、なんかで見たことある。これ、なんかで見たことある」
　土煙を上げながら、村長は疾走していた。背後には、轟音をたてて迫りくる、巨岩。
「これ、なんかで見たことある。ああ、曲がればいいんだ。曲がれば」
　天才的ひらめき。
　道を、曲がった。
　岩も曲がった。
「あれ。ついてくる。おかしいな。あれ」

道は、一本しかない。当然の結果だった。
村長の頭上に、はてなが三つ出た。
「とう」
そのはてなをつかんで、岩に向かって投げた。
何事もなかったかのように、岩は転がる。
「なんか、出ろ。なんか」
はてなに、頭突きした。どこかで見たことがある。
「久々だな」
聖なる者が出てきた。
「お前、違う。アイテム。アイテム出ろ」
もうひとつ。最後の、はてな。
出た。
巨岩。
二人が並走した。
「お前が余計なことするから。何やってんだよ」
「走ってんだよ。岩に追いかけられて。見ればわかるだろ、邪悪なる者め」
「村長、もう駄目だ。脇腹痛い」
言いながら、村長は聖なる者の背中に乗った。
「馬鹿か。展開考えろ。展開」
二人とも、つぶされた。岩にくっついた。一周。それぞれ、乗った。岩の上を走る。
「次は、低い天井だろ。もう、わかったぞ、村長は」
「どうやって、とまるんだ」
「逆に、足を動かすんだ。そうすれば、回転を止められる」
前に、漕いだ。当然、前に落ちた。
「馬鹿だ。お前、絶対、馬鹿だ」
聖なる者の前に、躍り出た。
「世は、情け」
最後の力を振り絞る。かにばさみ。聖なる者の足を刈る。転んだ。道連れである。二人とも、跳ね飛ばされた。
空を飛んだ気がした。

目を覚まし、辺りを見回す。
「せまいな」
聖なる者が、横たわっていた。
「お前、久しぶりに出てきたくせに、余計なことしかしないな」
「お前が呼んだんだろ」
何事もなかったかのように、聖なる者は起き上がった。

出口。さっきの岩がめり込んでいる。
「せっかく、出れたと思ったのに、またか。もう、村長は飽きたぞ」
まてよ。もしかして、はてなを出せば、また何かが出てくるんじゃないのか。
「キック」
パンチである。
聖なる者は、上体を反らし、かわす。村長の拳は、岩にあたった。
聖なる者は、村長の頭を岩に叩きつけた。
はてな。違う。星だ。
これで、無敵。そう思い、聖なる者は星をつかんだ。
金平糖である。
村長は、気絶している。
右手には、金平糖。目の前には、気絶した、馬鹿。出口は、ふさがれた。
少し、悲しくなってきた。
聖なる者は、星を二つに割った。一方を、村長の腹の上に放った。
「甘いな」
噛み砕いて、飲み下した。
仕方がない。聖なる者は、部屋の中央へ移動した。
片膝を、地につけた。静かに、高ぶっていく。
「召、喚」
不意に、村長が大声を出した。
驚き、聖なる者は転倒していた。脈が、激しくなっている。
村長は、寝返りを打った。金平糖が、聖なる者の方へ転がってきた。
「寝言か。驚かせやがって」
拾って、口に入れた。
「罰として、これは私が頂こう」
気を取り直し、再び集中した。聖なる者の毛が、逆立った。体の中を、何かが駆けた。
「召、喚」
地に、ぶつけた。それが、跳ね返ってきた。
聖なる者は、吹き飛ばされた。
今日、何回目だ。空中で、聖なる者はぼやいた。
土埃で見えない。影。現れた。
村長。
「なんだ。なんだ」
目を覚ましたようだ。
村長は、見上げた。壁のような、何か。大きい。
「眠らざる者だ」
静かに聖なる者が言った。

村長は、近づいた。壁に、目と口がある。
「寝てるぞ」
「いや、寝ていない」
聖なる者が、即座に否定した。すうすうと、音が聞こえる。
「おきろ。消しゴム君。おきて、村長たちを助けるんだ」
村長は、乱暴に眠らざる者を叩いた。石のように固い。
「眠らざる者だ」
眠らざる者が、低い声で言った。ほとんど、口は動いていない。
「寝言か。まあいい。とりあえず、助けてくれ」
まだ、村長は乱暴に叩いていた。
「背中に乗せてくれ」
聖なる者が言う。眠らざる者が浮いた。そして、横に倒れた。
「乗れ」
眠らざる者が、言った。
「乗れ」
背中に乗っていた村長が、聖なる者に手を伸ばしてきた。聖なる者は、何も言わず、その手をつかんだ。
「ゆけ。空飛ぶはんぺん野郎」
村長の掛け声と共に、眠らざる者は直進した。
「待て」
岩に激突した。また、吹き飛んだ。村長及び聖なる者。
「まず、壊すんだ。おちつけ」
壁に背を預ける格好で、言った。
眠らざる者が、岩に近づいた。無傷である。
口が、開いた。空気を吸う。まだ、吸う。とめた。
光。
岩が、消し飛んだ。
「やるな。はんぺん」
転がっていた村長が、歩み寄ってきた。おでこのところを少し擦りむいている。だが、笑っていた。
背に飛び乗り、三人は出口を目指した。アリたちの頭上を飛ぶ。聖なる者は、村長が立ち上がらないように押さえつけていた。もう、同じ手は食わない。そう、思っていた。
風が、心地よい。出口は、まだ見えない。ずいぶん深くまで落ちたものだ。
「なあ。ところで、なんで眠らざる者なんだ。モノリスだろ、こいつ」
「ちがう。眠らざる者だ。モノリスではない」
「モノリスだろ。お前も。なんか、言う機会なかったけども」
「私は、聖なる者だ」

　横腹を、肘で打った。
「セーナル・モノリス」
「聖なる者、だ」
　身を低くしながら、小突き合う。
　少し、上に傾いた。出口。白い、光。
「おお」
　飛び出した。
「太陽、久しぶり」
　外。眩しい。
　村長は、飛び降りた。そこに、モンササの姿があった。
「モンササ。相変わらずふっくらとしているな。心配をかけた。すまない」
　モンササは、軽く、うなずいた。
「そして、世話になったな。モノリス諸君」
「貴様。まだ、言うか。我々は、モノリスなどではない」
「モノリスだから。どう考えても」
「違うと言っているだろ。聖なる者だ」
　セーナル・モノリスは、声を張った。
「違うと言っているだろ。聖なる者だ」
　聖なる者は、声を張った。
「え」
「気にするな。デジャブだ」
「え」
「デジャブ」
「そうか」
「そうだ」
　納得のいかない顔で、村長は辺りを見回した。なぜ、二回、言ったのだろう。ああ、大事なことか。まあ、いい。
「この際だ。そこまで言うなら、私も聞こうじゃないか。お前は、こんなところで何をしている。私は、知っているぞ。ソン・チョーチス・サードよ」
　村長の顔つきが、不意に険しくなった。
「知っていたのか」
「当たり前だ。そこにいる奴もな」
　村長は、モンササを見た。
　モンササは、何も言わず、目を伏せた。
「じゃあ、ムクリもか」
　モンササは、頭を下げた。
「答えろ。ソン・チョーチス・サード。我等をモノリスと呼ぶ貴様が、こんなところで、一体何

をしているというのだ。なぜ、国を捨てた」
　村長は、言葉に詰まっていた。
「ソン・チョーチス・サード。かつて、我々は、モノリスとして、お前たちの国に仕えていた。だが、もう昔の話だ。我々は、もう、モノリスではない。我々は、目的を失ったのだ。モノリスである、理由を失ったのだ」
「お前たちも、国を捨てた」
「捨てられたのだ。ソン・チョーチス・サード。貴様が国を捨てた。結果として、それが我々を捨てたということなのだ。わからぬか。見損なったぞ」
「見損なうな」
「いや、見損なったぞ」
「そうはさせない」
「いや、見損なったぞ」
「そうはいかない」
「くそ」
　聖なる者は、転がっていた石を思い切り蹴った。
「私は、村長だ。ちっぽけ村の、村長だ。きけ。聖なる者。私には、私のやり方がある。決して、国を捨てたわけではない」
「守る価値もない国にした、お前が何を言う。今、あの国がどうなっているか、知らないのか」
「知らない」
「ソン・チョーチス・セカンドは死んだ。貴様の兄、ワン・チョーチス・サードの手の者によってな」
「なんだと」
「あいつの狙いは、あの国全てだ。力を得たんだ」
「あいつの狙いは、私だった」
「もう、お前に意味はない。そういうことだろう」
　村長は、下を向いてしまった。
「おい、泣くな。こら、泣くな」
　涙が、頬をつたって、地を濡らしていた。
「私が悪いみたいじゃないか」
　村長は、肩を震わせていた。
「私は、無力か」
「ああ、無力だ。今の貴様は、なんの力もない、ちっぽけな村長だ」
「ちっぽけな村長か」
「お前がいつも言ってることだぞ」
「ああ、そうだ。私が村長だ」
　人に言われると、気分が悪いな。ちくちょう。そう思い、村長は涙をぬぐった。
「縁があった。そう、思ってやる。ソン・チョーチス・サード。いや、村長」

　ティッシュを差し出した。村長は受け取り、もう一度手を出した。聖なる者は、もう一枚重ねた。二枚で、鼻をかんだ。
「私は、どうしたらいい」
「貴様が、本当にあの国を守ろうとして、王位を捨てたつもりならの話だ」
「ああ」
「ずっと、あの国に、王はいない。貴様が、逃げだしたからだ。我々は、モノリスではなく、司る者として、貴様に力を貸してやる。もう一度、あの国を守るために、力を貸してやる」
「本当か」
「ただし、条件がある」
「なんだ」
「王になれ。我々は、王にしか仕えない。それが、我々の誇りだ」
「どうやって」
「あの国の、王になるんだ。代行が死んだ。わかるだろ。王は、いないんだ。まだ、お前は王のままだ」
「まだ、時間はあるか」
「数年で、何ができる。だから、暗殺だった」
「さっき、力を得たって」
「言葉のあやだ」
「あや、か」
「どうする。ソン・チョーチス・サード」
　鼻水は止まり、涙も乾いていた。デフォルトである。
「伝えてくれ」
　村長は、じっと聖なる者の目を見た。
「村長は、王を兼ねる。種柿に、そう伝えてくれ。可能なら、私は王になる」
「王兼村長だと」
「村長兼王だ」
　村長は、自分の体が熱くなっていることに気がついた。
「出てこい。無き者」
　聖なる者が、明後日の方向を向いて、言った。
　姿を、現した。顔の半分を、布で覆っている。無き者である。
「ずっと、そこにいたのか」
「片方の、軍手のごとく」
「道路のか。ああ、道路のか」
「無き者。種柿殿のところへ行く前に、ワン・チョーチス・サードに伝えろ。宣戦布告だ。司る者は、ツー・イー・フォン家の国につく」
「御意」
　言いながら、無き者は消えた。

「国に、護衛を送る。兵も、送る。それで、正面から落されることはないだろう。だが、気を付けるのは、暗殺だ」
「村長は、ここにいる」
「まず、王位を継ぐことが、正式に決まってからだ。お前はもう、何年も行方不明とされていたからな」
　眠らざる者も、気がつくと姿を消していた。
「打倒、でっかか村」
　村長は、拳を突き上げた。
　淡い、青。不意に、拳が濡れた。雨。久しぶりの、夕立だった。全てが音に、包まれた。雲は薄く、雨粒は白く輝いている。
　村長は、天に向かって即興で適当な歌を歌った。
「ところで、どうしてお前の国はツー・イー・フォン家の国なんだ」
　仰向けに倒れ、雨に打たれている村長に、問いかけた。
　立ち上がる。
「言葉の、あやだ」
　拳を突き出し、村長は言い切った。
「嘘をつけ」
　聖なる者も、拳を出した。笑っていた。
　二つの拳が、ぶつかった。

　縁と、綾か。
　モンササは、一人、立ちつくしていた。
　あの、ワン・チョーチス・サードを討つ。
　線が交差した点。これから、自分たちが向かう場所だ。
　宿命。
　モンササは、そう、思った。
　雨は上がっていた。風が強く吹いた。何かをさらったような気がした。